

かんじんちょう 勸進帳と富樫氏

源頼朝に追われた源義経は、従者^{べんけい}弁慶をはじめとした数名を従え奥州に逃れます。『義経記』(室町時代)では、その道中に富樫氏の館に立ち寄ったとして、次のように記しています。

…白山宮に詣でた後、義経らを宮腰(金沢市金石付近)に先発させ、弁慶一人が富樫館に向かい、三月三日の宴を楽しむ富樫介の前で、東大寺復興の寄付を募る勸進帳を読み、たくさんの寄進を受ける。…

室町時代中期に演じられた能『安宅』では、その舞台を加賀の安宅の関として再構成しました。江戸時代には浄瑠璃、歌舞伎と^{ほんあん}翻案されましたが、中には富樫氏が登場しないなど、内容は様々でした。天保十一年(1840)に、能『安宅』をもとに新作し上演されたものが、富樫氏が登場する現在の『勸進帳』であると言われています。

歌舞伎 勸進帳のあらすじ

各地の関所に義経を捕らえるよう通達がいきわたる中、義経一行は、山伏の姿に変装して関所を通過しようとする。加賀の安宅の関守である富樫左衛門は、義経達が山伏に変装していることを知っていたため、義経一行を怪しんで通さない。そこで弁慶は何も書かれていない巻物を、寄進を募る「勸進帳」として読み上げ、一旦は関所を通過する。しかし、富樫の家来が中に義経に似た者がいるとして怪しんだため、再度富樫は義経一行を問いただす。弁慶は、持っていた杖で、義経を「お前が似ているばかりに通れない」とし、激しく打ちたたく。その姿を見た富樫は、弁慶の思いに胸を打たれて、義経一行の通過を許すのである。